

制約があるとは、 不便なことだが益がある

京都先端科学大学

川上 浩司

不便益とは、不便だからこそ得られる益のことです。そんなものあるのかと思われるかも知れませんが、四月号から毎月半年間、不便益事例を紹介してきました。その中で、先月は「家を建てるなら不便益」と題して、建売（新築マンション含む）やリノベーション済み中古（マンション含む）より、注文住宅や中古購入後にリノベの方が、入居者に不便益を与えるという話をしました。ここで不便益は、家のデザインに自分自身がコミット（関与）するのに時間や手間がかかることを不便と呼ぶことにすると、その不便が入居者にまるで旅のプランを

練っている時のような楽しさを与える、というものです。さらには注文住宅より中古購入後にリノベの方が、不便益は大きい。その理由は、制約です。新築なら真っ白なキャンパスに絵を描くがごとき自由度があるのに、中古をリノベするには、既存の構造体は壊せず、さらには非構造体を再利用する時もセンスが問われます。このような制約は不便ですが、おかげで自分の家のことを考える時間や機会を増やし、家を建てることを「自分事にする」という益を入居者に与え、家への満足度や愛着を高めます。

20

ここで、制約が大きいことは一般には不便なことと言われるけれど、それだからこそその益が得られる場合があることがわかりました。不便益を研究テーマとしている私としては、どんな場合に制約という不便から益が得られるか、言い換えれば制約という不便から益が得られる機序を解明しなければなりません。ただ、ここでそんな話をされても面白くないでしょうから、まずは制約が不便益を与える事例を探してみます。もちろん「赤信号では止まらねばならぬ」という制約が交通安全という益をもたらす」のような事例は排除します。「不便だけれども我慢してね、益があるから」という事例からは、何も面白い知見が得られそうにありませんから。（制約があるという）不便だからこそ益があるモノゴトを探してみます。

ところで、私が小学生の頃、遠足のお

やつは三百円まででした。子供心に「なんでやねん」と思ったものです。近頃は五百円ぐらいになっているかなと思って学生に聞いてみたところ、おやつは学校が準備して配ってくれたという学生がいました。その時は「そりゃ便利だね」と返したものの、後から「つまらなかつたろうなあ」とも思いました。今思えば、遠足の前日に一時間以上もかけてスーパのお菓子売り場をうろつき、自分ならではの組み合わせを考えたり、三百円ちよつきりにするために十袋に小分けされたお菓子を三袋だけ持っていったり、お菓子売り場を離れて食品売り場まで足をのばし、みたらしだんごがお菓子よりコスパが良いことを見つけたり、それを遠足のおやつとして持って行って友達に驚かれたりバカにされたり、こういうことが遠足でどこに行ったかよりも記憶に残っています。もし、三百円の制約がなかったら、遠足に持って行くおやつな

21

ど、母親に適当に買ってきてもらうか、家買い置きのおやつのいくつかを適当にみつろってリュックに放り込むようなものになっていったと思うのです。

制約といえば、二〇〇二年にデジカメに出荷台数を逆転されるまで、フィルムカメラが写真を撮る装置の標準でした。今ではスマホについているカメラで写真を撮ることが多いのですが、これもデジタルといえばデジタルです。デジタルしか触ったことのない人には想像もつかないかも知れませんが、フィルムカメラの不便さといったら、フィルムの枚数(市販のロール式フィルムだと二十四枚か三十六枚が一般的)が限られ、連写なんてとんでもないことです。また、シャッターを押す時にファインダーで見えている風景がどのように写真に写るのかは、後日現像してからしか分かりません。この不便さを極めた、レンズ付きフィルムという

ウェブで検索すると「今注目の」と形容されながら紹介されています。あるときテレビをポーツと見ていると、なぜレンズ付きカメラが好きなかと問われ「あの不便さがいんですよ」と高校生ぐらいの女の子が答えていました。インスタ映えではないのです。おや? と思いつた富士フィルムのウェブページを見てみると、「アナログ感が楽しめる」とか「ボケてる感じが楽しかったり」というインスタ映えに関連するフレーズだけでなく、「現像するまでわからないじれったさも楽しい」とか「失敗してもやりなおせないから一度のシャッターを大切に思う感覚も」など、不利益的なフレーズでレンズ付きフィルムを推していました。

これらに限らず、制約という不便から益が得られる事例がいくつも揃いました。そういえば、スポーツやゲームもルールという制約がなければ面白くありません。

カテゴリーがありました。いわば簡易使い捨てカメラです。カメラごと現像に出すと、カメラは帰ってこず、現像されたフィルムと写真だけ帰ってきます(使い捨て)。富士フィルムの「写ルンです」の初代に至っては、ボディが厚紙であったりファインダーはレンズとほぼ平行に開けられた穴であったりと、使い捨てでも惜しくないと思わせる仕掛けが満載です。

二〇一六年に富士フィルムさんが、「写ルンです」の三十周年記念として初代の復刻版を数量限定で発売されました。すると、即刻完売です。きっと、私ぐらいの年齢の人が懐かしがって買ったのだろうと想像したのですが、さにあらず、購買層は若者たち。レトロでかわいいつか、デジタルでは出せない独特の風合いがインスタ映えするとか、そういう理由で最初は飛びついたのだと思われれます。あれから六年の二〇二二年現在も、

ん。そこら辺にも、制約という不便から楽しさという益が得られる機序を見つけたヒントが隠されているようです。このような事例や知見に基づいて、新しいモノゴトをデザインしてみようというワークを学生達とやってみました。そこで出されたアイデアの一つが、京都の街歩きツアーを不便で面白くする「左折オンリーツアー」です。なんとなく京都市中心部が基盤目状であることから、左折オンリーという制約が街歩きを面白くさせそうです。詳しくは、来月。

川上浩司(かわかみひろし)

一九六四年生まれ。京都大学工学部、同工学研究科修了。京都大学助教授・特定教授などを経て京都先端科学大学工学部教授。不利益の研究で学会論文賞・出版賞多数。著書に『不利益という発想』(二〇一七) など多数。